

ヴァージニア・ウルフ「伝記という芸術」

A Translation of Virginia Woolf's "The Art of Biography" (1940)
from *The Death of the Moth and Other Essays* (1942)¹

坂本正雄 訳

translated by Masao SAKAMOTO

(和歌山大学教育学部英語教室)

2016年9月27日受理

I

「伝記という芸術」って口にしてはみるものの、はたして伝記って芸術かしら。こうした質問自体ばかりでるんだわ、きっと。伝記作者が与えてくれる大きな喜びのことを考えてみれば、そんなこと言うの度量が小さいってものよ。でもこうした疑問はいつだって口に出るもの。だからそこには何か隠されたものがあるに違いない。そう何か。新しい伝記を開くたびに、それはページごとに影を投げかける。その影の中にはなにかものすごいものがあるようにも思える。だって結局のところたくさんの人生が文字にされたとしても、いったいどれほどの人が生き残っていくって言うんでしょう。

この死亡率が高いわけは、詩や物語といった芸術と較べ伝記が若い芸術だからだと、伝記作家本人は言うのかもしれないわね。自分や他人への興味というのはわたしたちのこころのなかに最近になって出現してきたもの。イギリスでは十八世紀になって初めて、個人の生活を文字にするということに興味が集まるようになり、十九世紀になって伝記はようやく形をなして、たくさんの作品が生み出されたの。偉大な伝記作家というのがたった三人、ジョンソン〔訳注：ジョンソンはボズウェルによる伝記(1791)の主人公だが、伝記作家ではない〕、ボズウェル、ロックハート〔訳注：19世紀スコットランドの伝記作家。Walter Scotを義父に持つ〕だけだとしたら、その理由は伝記の形式が生まれて間もないからだ、と言うのよ。それから、伝記という形式はそれが形式として成り立つためのそしてまた伝記という芸術として成長するための時間があまりにも少なかったという弁解はきっと教科書に述べられてもいるわ。実際のところ詩を書く自己というものが出現して何世紀も経った後で散文を書く自己がなぜ出現したのか、ヘンリー・ジェイムズの前になぜチャーサーがいたのかといった理由を探りたい気にさせはするものの、そうした解決できない問題はそのままに、伝記には傑作といったものが存在しないという、つぎの理由に移るのが得策というもの。つまりは伝記という形式は芸術

の中でももっとも制限の多い形式だということ。その証拠はすぐにでも開陳できるわ。たとえばこんな「序文」があるとしましょう。ジョーンズ氏の生涯を書いたスミス氏は序文の中に感謝を述べる。書簡を貸してくれた友人たちへ、その中でもとりわけ、「最後にお名前を挙げることになるが、少なからぬ」助力を提供してくれた未亡人ミセス・ジョーンズ、こうした人たちの「助力なしにはこの伝記は決して書き上げられることはなかったろう」といったふうにスミス氏は書くの。一方小説家は、前書きに、「この作品の登場人物はどれも架空のもので」と言えばいい。小説家は自由、一方伝記作家には制約が多いのよ。

そうやってたぶん例の難しいそしてきっと解決不可能な問題にかなり近づいて行くことになるわ。ある本を芸術作品と呼ぶのはどういう意味なのか。ともかくも伝記と虚構の間にはなんらかの区別があるのよ。この二つを形作っているものが異なっているという証拠。一つは友人の助力により事実で形作られる。もう一つは何の制限もなく、とは言ってももちろん作家がこれだったら作品を生み出すのに良さそうだと思う理由で選んだ制限はあるものの、制限なしに創られる。そこが違いなのです。過去においては伝記作家はそうしたことは単なる違いというよりもとても大変な決定的違いだと分かっていたと思わせる理由があります。

未亡人と友人たちはきっといろんな要求をゴリゴリ押しつけてきたでしょう。たとえば当該の人物が天才なのに不品行な男だったら。気むずかしい男だったら。メイドの顔めがけてブーツを投げつけるような男だったら。未亡人はこう言うかもしれない。「それでも愛してましたのよ。だってあの子たちの父親ですもの。それから世間一般の方々、あの人を愛してくださいますから、その方たちを幻滅させるようなことがあっては決してなりませんわ。書かずにおいてくださいな。割愛してくださいな」。伝記作家はそのとおりにしたのよ。こうしてビクトリア朝時代の大部分の伝記がウェストミンスター寺院に飾られている蠟人形のような作品になってしまったのです。葬列が通りを通る。

それと一緒に運ばれる作品、棺のなかに眠る遺体に表面だけはうまい具合に似せた人形として運ばれていったのです。

そうして十九世紀が終わりを告げようとする頃、変化が起きました。今度もまた見つけることが難しい理由で。未亡人たちは寛容の心を持つようになりました。大衆のもの^{ひとがた}の見方は鋭いものとなりました。たんなる人形では説得力がなくなってしまったのよ。それでは読者の好奇心を満足させることができなくなったのです。伝記作家たちはきつとある一定の自由を手に入れたのです。少なくとも亡くなった人物の顔には傷やしわがいくつもあったとほめかすことはできるようになったのです。フルード〔訳注：James Anthony Froude 1818-94〕の書いたカーライル伝は赤ら顔に塗られた蠟人形ではけっしてありません。フルードのつぎにはエドムンド・ゴス卿〔訳注：Sir Edmund Gosse 1849-1928〕が出てきました。自分の父親〔訳注：Philip Henry Gosse 1810-88〕のことを間違いの多い人物だったと書きました。エドムンド・ゴスのつぎに、今世紀〔訳注：20世紀〕初め、リットン・ストレイチー〔訳注：Lytton Strachey 1880-1932。1909年2月17日 Virginiaに求婚・婚約し、翌日解消された。Lyttonには同性愛者という噂があった。Lyttonの伝記*Queen Victoria*にはVirginiaへの献辞がある〕が出てきました。

II

リットン・ストレイチーという人物は伝記の歴史においてたいそう重要な人物です。少し時間をかけて考えてみることにしましょう。著名な三つの作品、*Eminent Victorians*〔訳注：ナイチンゲールやトマス・アーノルドらの伝記。それまでの伝記と異なり、偶像破壊的なスタンスで書かれた。1918年刊〕、*Queen Victoria*〔訳注：ビクトリア女王の伝記。1921年刊〕、*Elizabeth and Essex*〔訳注：エリザベス I 世とエセックス伯の伝記。1928年刊。優雅な文体で知られる〕は伝記に何ができて、何ができないかを一緒に示しているの。ということでこれらの作品は、伝記ははたして芸術なのか、そうでないならなぜそうでないのかといった問題に、考えつくだけ多くの答えを示しています。リットン・ストレイチーは伝記作者としては実にいい時に生を受けました。1918年リットンが初めて伝記を書いたとき、伝記という形式は新たな力、何を書いても良いという自由を得て、大きな魅力を持つ形式となりました。リットンのような作家、詩や劇を書きたい気持はあってもその創作力に自信を持ってない作家にとって、伝記はそれらに代わる望みを示してくれるもののように見えたの。死者について真実を語ることがついに可能な時代となったから。ビクトリア時代には著名な人物がたくさんいました。その多くはべったり貼り付けられた化粧漆喰でひどい変型を施されていました。そうした人物の再創造、そ

これらの人物をありのままに示すことは天分を、詩人や小説家の才能に類似した天分を必要とする、それでいて自分が欠落を自覚している想像力を要しない仕事でした。

伝記は書いてみる価値のあるものとなったのよ。そうして優れたビクトリア人^{Eminent Victorians}たちを短くまとめた研究が読者に引き起こした怒りと興味は、マニングやフロレンス・ナイチンゲール、またゴードン、それからその他の人物を当時とは異なった姿で描き出すのがリットンには可能だということを示したのです。この人たちはもう一度二十世紀のこの世に現れたのです。今一度この人たちはごうごうとうるさい議論の中心に立ったのです。ゴードンは本当に酒飲みだったのか、それともこの話は創作なのか。フロレンス・ナイチンゲールがメリット勲章を受け取ったのは寝室だったのか、それとも居間だったのか。ヨーロッパ戦争が起きかけているときではありましたが、リットンの伝記は物議を醸し、こうした細かいところまでと驚くほど興味の対象にしていったのです。怒りと笑い声が入り交じりました。そうして版をいくつも重ねることになったというわけ。

でもリットンのこの伝記はいささかの強調すぎと風刺とでゆがめた像を提供しました。二人の偉大な女王、エリザベスとビクトリアの伝記では、もっと野心的な試みを見せました。伝記というものが表現できることをこれほどまでに示す機会に恵まれたことはありませんでした。だって伝記という形式が勝ち取った力をみな使うことができる作家によって試されることになったのですから。リットンに怖いものはありませんでした。すでに才能を示していましたし、自分のやるべきことを熟知していました。新しい伝記は伝記という形式に大きな光を投げかけています。だって二冊の本をもう一度読んだ後、伝記の中のビクトリア女王が素晴らしい成功を取めていること、伝記の中のエリザベス女王はそれに対し失敗だということをだれが疑うでしょう。でもまた同時に、その二人を較べると、失敗なんかしたのはリットン・ストレイチーではないと思えてくるのです。この作品は伝記という芸術です。ビクトリア女王を描くときリットンは伝記を技能として扱っています。伝記の限界内に甘んじて取めています。エリザベス女王を描くときは伝記を芸術として扱っています。伝記の限界など鼻であしらっているのよ。

でも続けてこう尋ねてみないわけにはいかないわ。こうした結論にはどうやって達するのか。どのような根拠に基づいているのか。まず第一番にはっきりしていることは、伝記を書くリットンに対し、二人の女王が極めて異なった問題を提示しているってこと。ビクトリア女王については何でも分かっていること。その行動は言うにおよばずその考えだってほとんどが国民の知っていることだったの。ビクトリア女王ほど

しっかりとみんなに知られ、正確に記憶されている方はおられませぬ。リットンには伝記の中に女王の姿を捏造することはできなかったのよ。どんなときにもなんらかの記録が手許にあり、捏造を阻んだからです。そうしてビクトリア女王の下りを書いているときリットンはその条件を飲まねばならなかったのです。リットンは伝記作家としての力、題材を選んだり、結び合わせたりする力を充分に活用しましたが、厳格に事実の世界に留まりました。人がしゃべったことばはどれも実証できるものでした。どの事実も本物であることが確認されていました。その結果ひょっとしたらボズウェルが年老いた辞書編纂者に対して行ったのと同様のことをご高齢の女王に対して行うような伝記となったのです。ボズウェルのジョンソンが今やわたしたちのジョンソン博士となっているように、リットンのビクトリア女王が将来わたしたちのビクトリア女王になるのでしょうか。ほかの伝記作家の書いたビクトリア女王はかすれ消え去るのです。それはとてつもない離れ業でした。そしてきっとその偉業を成し遂げた後、リットンはもっと女王の像を鮮明にしたいと思ったのです。ビクトリア女王はしっかりとこの世に存在し、手に触れることができる存在です。でも明らかにビクトリア女王は制限された存在となってしまいました。伝記という形式は詩の激しさ、劇の興奮を幾許かでも生み出すことはできないのでしょうか。事実の世界にある特別な力、現実を示す力、それ自体の創造性を保つことはできないのでしょうか。

一方エリザベス女王はその実験に完全な力添えをしてきているようです。エリザベス女王についてはほとんどが知られていません。女王が暮らした社会は遠すぎて当時の国民の習慣、行動の理由、そして行動さえもが分からない、曖昧模糊としたものだったのです。「どのような技術を用いて当時の見知らぬところの中へと道を切り進めていくことができるのか。当時のより不可解な社会の中へ。そのことがはっきり分かれば分かるほど、その不思議な社会がますます離れた存在となってゆくのだ」。伝記の最初のページにリットンは書いています。でも明らかに、エリザベス女王とエセックス伯の間には悲劇的な歴史が眠ったままに半ば現れ、半ば隠されたままに存在したのです。二つの世界にあるそれぞれの利点を結びつけた本、伝記作家という芸術家に、創造の自由を与え、事実の支援をもってしてその創造を支えた本、伝記であると同時に芸術作品でもある本を作るのに、あらゆる事柄が支援の手をさしのべたようです。

それでもその二つの利点の融合はうまく働いていないことが分かりました。事実と虚構は混じり合うのをいやがったのです。エリザベス女王は、ビクトリア女王が真に迫っていたのとは対照的に現実味のある像にはなりません。そしてクレオパトラやフォール

スタッフが虚構の産物であるという意味においても、新たに創り出されたものでもなかったのです。その理由は女王についてほとんどのことが不分明であったということなのでしょう。リットンは創作せざるを得ませんでした。それでも幾許かのことは分かっていました。創作はそのためにそこで止まってしまいました。女王は曖昧模糊とした世界、事実と虚構の間で揺れ動いています。現実の肉体を与えられるでもなく、創作の自由を与えられるわけでもなく。エリザベス女王にはなにか中身の無い感じ、悲劇を創ろうとしてクライマックスのない、登場人物たちは巡り会いをするもののぶつかり合うことがない悲劇を創ろうとした努力の跡が見て取れます。

もしこの診断が正しければこう言わなければなりませんわ。問題は伝記という形式にあるのだと。伝記にはさまざまな条件があります。その条件というのは事実立脚しなくてはならないということ。伝記の中の事実というのは、伝記作家以外の人々によって確認しうる事実ということ。もし伝記作家が、創作を行う作家同様に事実を、誰も確認しようがない事実ということですが、捏造するのであれば、そして別種の事実と結びつけようとするのであれば、それぞれが互いを壊してしまうこととなります。

リットン・ストレイチー自身は『ビクトリア女王』でこの条件の必要性を理解し、自発的に従ったように思われます。「女王が四十二歳になるまでは大量で種々の信頼できる情報に照らし出されていた。夫君アルバートの崩御とともにとばりが降りてくるのだ」〔訳注：ビクトリア女王は1861年夫の死後十年以上にわたり服喪した〕と、リットンは書いています。そしてアルバートの死とともにとばりが降りてきて、信頼できる情報も手に入らなくなったのです。伝記作家は先例にならわなくてはならないことをリットンはよく知っていました。「簡単でまとめ書きのようなお話で満足しなくてはならなかったのだ」と書き、実際女王の晩年は簡単にまとめられてしまいました。しかしエリザベス女王の生涯全体はビクトリア女王の晩年よりももっと厚い覆いの向こう側に隠れてしまいました。それでもリットンは自分の断り書きは無視して、簡単でまとめ書きのようなお話ではなく、実際には信頼できる情報のない、よく知りもしない心と、さらにわかりもしない現実とを書き続けていったのです。自分で示したようにリットンの試みは失敗するよう運命づけられていたの。

III

自分が書くものは友人や手紙、文書に縛られていると伝記作家がこぼすとき、実は伝記に必要な要素にまさに指を載せているように思えるの。そしてそれがまた必要な限界であるように思えます。というのも創作された登場人物はその創作された世界での事実はたっ

た一人の人物が、つまり作家ですが、証明すれば良い自由な世界で生きています。信憑性は、作家自身の想像力が信頼するに足るかということにかかっています。そうした想像力で創り出された世界は、他人が提供する信頼の置ける情報で成り立つ世界よりは、まれな世界、激しい世界、そして全体的に同質な世界なのです。そしてこうした違いにより二種類の事実というのは混じり合うことがないのです。触れあえば、お互いが壊れてしまう。結論はこうなるわ：だれもこの二つの世界を上手に用いることはできない。どちらかを選ばなくてはなりませんし、その選択を遵守しなくてはならないのです。

でも『エリザベス女王とエセックス伯』が不首尾に終わったことで、上記のような結論が導き出されはするものの、この失敗というのは、格調高き技術をもってして実行された、思い切った実験の結果でしたので、リットンに次なる発見をもたらす道へと導くのです。もしリットンが生きていたなら、きっと自分が切り開いた静脈の検査を仕上げていたことでしょう。ご存じのとおり、ほかの作家が切り開いて行ってくれるであろう道筋をリットンは示してくれています。伝記作家リットンは事実というものに縛られています。それはそうなのですが、そうだとでも利用できるすべての事実について裁量権を持っているのです。もしジョーンズがメイドの顔めがけて長靴を投げつけたなら、イシュリントンに女を住まわせてたら、夜中のやんちゃの後酔っ払って溝にはまり込んでいるのが見つかったら、そのとおりに描き出すことができるに違いありません。少なくとも名誉毀損法やわたしたちの判断が許す限りはということではあるのですけど。

ただこうした事実というのは科学の事実とは異なります。科学の事実というのは一度発見されればいつだって同じこと。一方、作品が用いる事実というのは世間の意見に左右されます。意見というのは時代が変われば、変化します。心理学者たちが明らかにしてくれたことにより、いけないことと見なされていたものがことによると今では不運、ひょっとすると好奇心、もしかするとどちらでもなくて、どっちにしろあまり意味のないつまらない癖だということになります。セックスがらみのことも覚えているだけでも変化してきました。こうなると、多くの過去の事柄が破壊されてしまって人がどのような顔をしていたのかその本当の特徴を消してしまうことになってしまいます。章のタイトルの多くが、たとえば大学での生活とか、結婚、就職、などは気まぐれに選ばれ、他との区別を付けるため無理矢理選ばれたものです。主人公の姿は実際のところ、もっと違った道筋を取ったのです、おそらくはね。

こうして伝記作家というのは、読者大衆よりは坑道のカナリアみたいにずっと先を進んでいっているの

です。社会の雰囲気进行分析し、虚偽や作り事、今では廃れてしまった社会の慣習が当時はあったのだというようなことを見つけるのです。真実を見極めようとする伝記作家の嗅覚はいつもスイッチが入っていて、しかも皆の目に触れることなく働いています。そしてまたわたしたちの時代は新聞や手紙、日記といった手段で、カメラにも似た人々の目があらゆる角度からあらゆる人々に向けられている時代なので、同じ顔を見ているにもかかわらず、別の全く逆の顔が写し出されるということにも伝記作家は対応しなくてはなりません。人が目を向けない場所に姿見を掛けることで、伝記はある部分を拡大してみせることもあります。それでもこうしたいろいろな違いがあるが故に、伝記は、多くの混乱ではなく、より豊かな統一を生み出すことにもなるのです。そして更に昔は知られていなかったことがたくさん知られることになり、問題は必然的にこういうことになるのです：偉人たちの生涯が記録されるだけで良いのか。人生を生き、そしてその人生の記録を残した人は誰だって伝記にしてもらえただけの価値はあるのではないのか。成功の人生同様失敗の人生も、著名な人生を送った人同様つましい人生をおくったひとも。そもそも偉人というのは何なんだろう。小さな人生って何。功績といったものの秤を作り替えて、わたしたちの時代に合う賞賛を得る主人公を作り上げなくてはならないのです。

IV

伝記はこうして今その経歴のスタート地点に立っただけです。その前途には長い精神的な人生が待ち構えています。きっと困難、危険、そして難しい仕事でいっぱい的人生が。それでもその人生は詩や小説の人生とは異なっていることは確信できます。おそらく緊張の度合いだけは低い人生なのです。その理由で、でき上がったものは、作家が自分の作品に対し折々に勝ち取る芸術の永遠性を獲得できるように運命づけられているわけではないのです。

そのことにはすでにある証明があるようです。ボズウェルが書いたジョンソン博士でさえ、シェイクスピアが創り出したフォールスタッフほどには長生きしないでしょう。楽道家のミコーバ〔訳注：ディケンズの *David Copperfield* の登場人物〕や貧乏なミス・ベイツ〔訳注：オースティンの *Emma* に登場する、だれももらい手のない老嬢〕がロックハートの書いたウォルター・スコットやリットン・ストレイチーが書いたビクトリア女王よりもきっと長生きするでしょう。だって小説の登場人物の方がずっと長持ちのする材料でできあがっているからです。作家の想像力はもっとも激しいときには事実としては滅び去るものをなしにしてしまうのです。長く持つもので作り上げるのです。でも伝記作家はその滅び去るものを受け入れなくてはなりません。その

減び去るもので作品を作り上げなくてはなりません。作品の生地に減び行くものを埋め込んでいかななくてはならないのです。多くは減び去るものです。ほんのちょっとしたものだけが生き残っていくのです。こうしてこういう結論に達するのです：伝記作家は職人だ、芸術家ではない。その作品は芸術作品というよりはその中間物どっちつかずのものだと。

しかしその低レベルにおいても伝記作家の作品は非常に貴重なものなのです。伝記作家の存在は測りがたいものなので、感謝し尽くせるものではありません。だって想像力のうずまく強烈な世界ではわたしたちは健全に生きることはできないから。想像力というのはすぐに人を疲れさせ、休憩と元気回復の食事が必要となるからよ。しかし疲れ切った想像力に必要な食事は質の悪い詩や二流小説ではありません。そんなものは想像力を鈍らせ、墮落させてしまうのよ。ちゃんとした事実というもの、正真正銘の情報なのです。リットン・ストレイチーが示したように、そこから質の良い伝記は生まれてくるの。現実の人物はいつ、どこで生きていたのか。どのような顔をしていたのか。編み上げの長靴を履いていたのか、それともサイドがゴム張りのものなのか。叔母は誰で、友人には誰がいたのか。好きな女性には何でも面倒を見てやったのか。どのような面倒を見たのか。そして死ぬときはクリスチャンにふさわしく、ベッドで亡くなったのか、それとも…。

真実の出来事を語ることで、輪郭が分かるように大きな出来事から小さな出来事をふるい分け、全体を形作することで、伝記作家は詩人や小説家よりも想像力を刺激する方策を駆使するのです。もちろん真に偉大な詩人、小説家を除いてということではあるけどね。というのも力量不足の詩人や小説家であれば、わたしたち読者に真実味を与える高い緊張感を創り出すことはできません。しかしほとんどの伝記作家は、もし事実に対する配慮を欠かなければ、わたしたちの記憶に足し算できる新たな事実をいくつも与えてくれるのです。創造力のある事実を、創意力のある事実を、いろいろな連想を引き起こし生み出してくれる事実を提示してくれるのです。このことについてはまた、別の証拠もあります。だってある伝記が読まれてページが畳まれるとき、ある場面が幾度記憶の中に明るく照らされることでしょうか。ある人物が心の奥底に幾度生き返ることでしょうか。そしてなんということでしょうか、詩や小説を読むときに、以前経験したことを思い出すように、ああこれは一度見たことがあるなあと思わせるようなびっくりするほどの認識を感じさせてくれるのです。

注

- i 2000年からVirginia Woolfの短編小説やエッセイなどの小品を学部の『紀要』上に翻訳してきたが、今回が最後である。なお著作権の処理については、ディラン・トマス作品を含め、1970年の和訳に関する特別措置に従った。

